

『技術教育研究』
の20年に寄せて
◎ 佐々木 享

我が『技術教育研究』が40号を迎えた。年に2冊だから創刊以来20年だ。よくがんばってきたとおもう。最近、古書店の目録で『技術教育研究』がまとまって売りに出されているのを見かける。古書店に売る人がいるんだなおもうと同時に、結構いい値がつけられているのでほっとする。古書店主たちは、中味を吟味して値をつけている筈はないのに、独特の勘をもっているのだから、油断はできない。

『技術教育研究』の創刊と編集に私が直接タッチしたのは、1972年から事務局長を辞任する76年8月まで、つまり創刊号から第10号までである。この時期を中心に、若干の感懐を記してみる。

『技術教育研究』創刊の頃 『技術教育研究』が創刊されたのは1972年1月、私が事務局長を引き受けて2年目の時だった。雑誌の創刊を提案したのは私だった。もちろん常任委員会（当時のメンバーは代表委員＝長谷川淳、常任委員＝浅井敏夫、佐々木、高橋豪一、幡野憲正、原正敏、森下一期、山脇与平）に相談した筈だけれども、くわしい討議の様子の記憶がない。私が技術教育研究会（技教研）の事務局を原正敏氏から引き継いだ1970年8月当時の会員数は約80名だったと記録されている。（佐々木編『技術と教育』・「技術教育研究」総目次・技術教育研究会略年表』1980年1月、29頁）。72年8月の総会（於温海温泉）時点での会員数は179名と報告されていたから、実質財源ゼロで創刊号を1000部印刷したのは、いま考えると冒険だった。

1月に発行したのは、例年1月に開催される日教組・日高教の教育研究全国集會に合わせたからで、この集會の技術教育分科会で販売することを目論んだからである。この年の教研集會は甲府だった。できたばかりの創刊号をパブリカに積んで、まだ大月あたりまでしか開通していなかった中央高速道を1人で走ったこと、途中で雪になり、タイヤにまいたチェーンが切れて立往生したことを憶いだす。私もまだ40前だった。

第2号は夏の技教研大会（この年は温海温泉で開かれた）に向けて発行した。1月と8月に発行する方式は、その後定着した。

雑誌創刊の企図と意義 雑誌の創刊を提案したのは私だったと書いたけれども、これは私の思いつきではない。技教研の『会報』第2号（1960年3月）には、すでに雑誌創刊の企画が発表されていた。気宇壮大な原正敏氏の企画の機が10年目にして熟したというべきであろう。

教科研の『教育』や産教連の『技術教育』（のちの『技術教室』）は月刊でかつ市販されている。後発の私たちの『技術教育研究』は、販路や売行きを考えると、年2回刊が限度であろうと考えられた。しかしそれなら特色ある雑誌にしよう、と企図した。

その1つは、『会報』と違って少し長い論文や実践報告を掲載することができる点を活かすことである。月刊はおろか季刊ですらないのだから、時事的なものが不向きであることは明らかだ。しかし、長く残るような、基礎的な研究、重要な論点を提起するような論文や実践報告を掲載したいと考えた。

長谷川淳先生の「戦後日本の技術教育史（1）～（5）」（第1、2、3、5、8号）は、上述の企図にそった、初期の代表的論文の一つである。これは、技術・家庭科の前身である職業科の戦後の出発点を研究しようとする人には、いまなお必読文献である。技教

研の外にいる研究者でこの長谷川論文を引用している人は2、3にとどまらない。その中には国立国会図書館でこの論文をコピーしたという人もある（『技術教育研究』は、創刊号以来国立国会図書館に納本されている）。

創刊号を飾った原正敏氏の「技術科教育研究運動の現状と課題」も、力作だった。26頁というこの論文の長さは、多分、8号の角田一郎論文に次ぐものである。むろんこの原論文を力作と称する所以は、その長さによってではなく、提起させている論点の鋭さと視野の広さにある。ここでは、学習指導要領はもちろんのこと、技教研、産教連をふくむ当時の技術科教育研究の動向が対立点や一致点を鮮明にするかたちで整理されている。これは、技術科教育史研究を志す者にはいまなお必読文献の一つであるようにおもわれる。

角田一郎「高等学校制度と職業教育」（第8号所収）も、記憶にのこる論文の一つである。角田一郎は、『高等学校 教科課程の理論と実際』（1948年、興文社）の著者として、戦後日本の高校教育史を研究する者には忘れられない名である。38歳の若さで亡くなった角田氏のこの重要な論文が私たちの雑誌に掲載されたいきさつは、この論文の末尾にある如くである。草稿は、戦後の、紙不足の時代にわら平紙にぎっしりと書き込まれ、幾度となく推敲が重ねられていた。それを活字に起こしてみると、ほとんどそのまま立派な論文になると知ったときの驚きは忘れられない。

「労働と教育」に始まった特集方式 初期の『技術教育研究』は、特集方式をとらななかった。最初の特集は、第6号（1974年5月）の「労働と教育」であった。これは、74年2月に技教研が名古屋で開いた同名のシンポジウムの報告と討論を中心に編集されている。特集のタイトルもよかったし、各論文も充実していたので、この号はよく売れた。

雑誌づくりにはしろうとの集まりである私

たちは、雑誌は特集方式の方が売りやすいことにこの号ではじめて気づいた。以後、「高校教育民主化と職業教育」（第7号）、「諸外国の職業・技術教育」（第9号）、「技術論と技術教育」（第10号）、「実践記録と検討」（第11号）、「技術教育の教授法」（第12号）、…と特集方式が続いた。

40冊にも達する雑誌から目立った特集を選び出すことは難しいけれども、2回の視察旅行をもとにした「ソビエトの技術・職業教育」（第18号）、「ソビエトの技術・職業教育Ⅱ」（第22号）は、いまとなつては貴重な記録となった（私の記憶では、この特集号は2回とも売行きがよかった）。

苦心の多かった実践記録 『技術教育研究』誌には、少なくとも私が事務局長をしていた時期には、編集方針の定型というようなものはなかった。強いていえば、毎号必ず授業実践の記録とそれに対するコメントをのせたいという願望があった。多忙な現場の教師に授業記録の提出をもとめるのだから、これは大へんだった。しかしほぼ毎号力作が掲載されてきたのだから、筆者各位には敬服のほかはない。これは私たちの貴重な財産である。

『技術教育研究』の未来に 私たちの雑誌はいわゆる市販のルートを持っていないから、ひろめるためには苦勞した。私自身も創刊後しばらくは、各地の研究会に出かける時は、必ず、何冊か持って行くようにしていた。宅急便などというシステムがない時代にそれができたのは、若さだった。今後も、会員自身がひろめない限り、私たちの雑誌がひろがる道はない。

それにしても、ひろめるに価する、買ってもらふ価値のある雑誌にすることが、私たちの最も重要な課題である。会員各位の知恵と力をお借りしたいと切におもう。（技術教育研究会代表委員、元事務局長。名古屋大学）